

## 【研究1-1】

### 研究課題

### 子育て期にある夫婦ペアレンティング調整パターンと関連要因

#### 1. 緒言

子どもを育てる環境は、1950年代までは同居の祖父母や隣家など、婦夫(子どもの親)以外に子育てに協力してもらえ人が身近にいた。しかし、時代は核家族化が進み子育ては基本的に夫婦だけで行う環境に変わった。子育ては夫婦と一緒に協力しなければうまく行かないと考えるが、男は仕事、女は家庭という役割分担で表面上うまく回って行き、それがいつのまにか子育ては母親の仕事という固定観念が出来上がっている。

育児に参加していく関係性を指す言葉に、“コペアレンティング”がある。コペアレンティングは「(離婚後の)共同養育、共同子育て」と訳され、「夫婦関係を基盤に母親と父親が互いに子育てを支え、子どもに安定した生育環境を提供するために協力し合うこと」とされ、子育てを母親だけに任せるのではなく、父親も一緒に参加して夫婦で協力し合って子育てを行う意味もある。また、両親が親としての役割をどのように一緒に行うのかということ、さらに広くその子どもの世話と養育に責任を負うべき複数の養育者が共有する行為とされている<sup>1)</sup>。

1995年頃より海外で二人親家庭にコペアレンティングの概念が導入されて研究がすすめられており、母親が父親の育児関与を妨げる直接間接の原因となりうる。つまり性役割観が強い母親は、父親の育児関与が低いことが明らかにされている<sup>2)</sup>。

研究者として長年取り組んできた子育ての研究において、母親が育児をしていて感じる、ストレス、幸福感、自信は、夫の関りが大きいことが明らかにされている<sup>3)</sup>。また、妻が認知する夫からのサポートは子どもの成長とともに低下していることも明らかにされている<sup>4-7)</sup>。そして、夫婦の親密性も低下している<sup>8)</sup>。

我が国の子育て研究は、支援の評価や、父親の養育行動など父母別に検討するものが圧倒的に多い<sup>9)10)</sup>。あるいは父母の行動の差異や父母役割の調整行動の検討<sup>11)12)</sup>など、子育て生活における夫婦関係を扱うものもあるが<sup>13)</sup>、子どもに対する実際的なかわりの協働やその調整については報告されていない。

コペアレンティングを進めることは、共働き夫婦が円満な関係を築くことになり、子どもの成長にも大いに良い影響を与える<sup>14)</sup>。父親の育児関与を阻んでいる要因や夫婦のコペアレンティングを明らかにし父親の育児関与を増加させる課題があると考える。

本研究においては、コペアレンティングの視点から発展的に進め、ペアとしてとらえた夫婦の子育てにおける夫婦間調整の研究に踏み込んで、望ましい子育て環境を整えていくための介入プログラムの提案を目指した研究の第一歩とした。

#### 2. 研究目的

母親が行う父親の子育て関与を促進する行動と批判する行動「夫婦のペアレンティング調整」について、実態と夫婦のペアレンティング調整に対する認識、夫婦の調整行動の関連要因を明らかにする。望ましい子育て環境を整えていくための介入プログラムを提案することを目指したい。

#### 3. 研究方法

##### (1) 調査対象

3歳から4歳の子どもをもつ母親と父親計1062人に調査用紙を配布した。

##### (2) 調査期間

調査期間は2018年10月から2018年12月であった。

##### (3) 依頼方法

X県に位置する幼稚園並びに子育て支援センターへ調査協力をお願い文と共に質問紙を同封し、直接研究者が説明をして施設管理者に協力を依頼した。父母それぞれへの質問紙の依頼文には、回答後母親と夫の質問紙を別の封筒に入れて封をして園またはセンターに持参すること、調査の協力にあたり、調査に協力をしない場合や途中で辞退しても不利益がないこと、利益として子育てにおける自分の考えや思いを振り返る機会となることを明記した。調査用紙は施設責任者から対象者に配布され、回収は施設に設置された回収BOXにいれ匿名性を担保した。調査は無記名で行ない、調査用紙の表紙の同意チェック欄にチェックされた場合研究への同意が得られたものとした。

##### (4) 研究デザイン

尺度を用いた選択的的回答並びに記述式質問項目による自記式質問紙調査

##### (5) 調査内容

選択的的回答

◇ 清水らによる尺度(育児幸福感尺度短縮版<sup>15)</sup>、育児ストレス尺度短縮版<sup>16)</sup>)

子育てをしていて感じる幸せな気持ちについて

・子どもとの絆

・育児の喜び

・夫への感謝

子育てをしていてつらいと感じることについて

・心身的疲労

- ・育児不安
- ・夫の支援のなさ

- ◇ 子どもが生まれる前に親としての実感の有無
- ◇ 出産後の生活のイメージの有無
- ◇ 里帰り出産により夫婦別生活の有無
- ◇ 母親が行う父親の子育て関与を促進する行動と批判する行動について夫婦ペアレンティング調整尺度<sup>12)</sup>
  - ・促進行動
  - ・批判行動
- ◇ 自分の性格について自己志向的完全主義尺度<sup>17)</sup>
  - ・高い目標
  - ・完全でありたい
  - ・ミスを気にする
  - ・自分の行動に漠然とした疑いをもつ
- ◇ ジェンダーに関する影響が示唆されていることから<sup>11)</sup>結婚の現実尺度<sup>18)</sup>の認識について
  - ・相思相愛
  - ・夫への理解・支援
  - ・妻への理解・支援
- ◇ 夫婦の話し合いが関係していることから<sup>17)</sup>子どもが生まれてからの生活についての話し合い
  - ・話し合いの有無
  - ・話し合いの時期
  - ・話し合いの頻度
  - ・話し合いの内容に納得したか

#### 自由記述式回答

- ◇ 育児行動を批判されたときどのように感じ受け止めたか
- ◇ 批判的な行動の背景にあるものについての考え
- ◇ 結婚後相手の生活態度に変化について 感想も含む
- ◇ 年齢
- ◇ 子どもの人数
- ◇ 子の年齢
- ◇ 同居家族
- ◇ 就労形態

#### (6) 研究倫理

調査の依頼文には、自由意思による協力であること、回収した後は番号化して処理し、調査・分析終了後はデータを研究結果公表後シュレッダー破棄することを明記した。倫理審査は名古屋学芸大学倫理委員会の審査を受け平成 29 年に承認(#274)を得た。

## 4. 結果

### (1) 対象者の属性と子育て状況

調査用紙の回収は 516 人であったが、うち母子家庭の母親 3 人と欠損解答のあった 14 人を分析対象から外した。母親 291 人(64.8%)、父親 208 人(46.3%)であり、計 499 人(有効回答率 47.0%)のデータを分析対象とした。結果を以下の表 1 に示す。

	N=499			
	母親n=291		父親n=208	
	mean±sd			
年齢	37.2±4.5		39.5±5.8	
子ども数	2.1±0.71		2.1±0.7	
末子年齢	3.3±1.8		3.3±1.8	
夫婦の年齢差	3.0±3.5		3.0±3.4	
職業				
家事従事	151	51.9%	1	0.5%
フルタイム	11	3.8%	195	88.9%
パートタイム	98	33.7%	0	0.0%
その他	23	7.9%	22	10.6%
育休中	8	2.7%	—	—
家族形態				
核家族世代	268	92.1%	193	92.8%
三世帯世帯	23	7.9%	15	7.2%
出産前親としての実感				
有	91	31.3%	37	17.8%
無	196	67.3%	169	81.3%
未回答	4	1.4%	2	1.0%
出産後の生活のイメージ実際と変わらない				
はい	57	19.6%	64	30.8%
いいえ	231	79.4%	141	67.8%
未回答	3	1.0%	3	1.4%
出産は里帰りしばらく分かれて生活した				
はい	166	57.0%	115	55.3%
いいえ	124	42.6%	92	44.2%
未回答	1	0.3%	1	0.5%

(一) 非該当

出産前に親としての実感をもっていた母親は父親より多く、産後の生活イメージとのギャップを感じていたものは父親より母親が多く、79.4%と8割近くが感じていた。

### (2) 夫婦ペアレンティング調整パターンとの比較と関連

夫婦ペアレンティング調整尺度得点を「促進行動が低く批判行動も低い」「促進行動が低く批判行動が高い」「促進行動が高く批判行動が低い」「促進行動が高く批判行動も高い」の 4 パターンに分類した。結果を以下の表 2 に示す。夫婦ペアレンティング調整 4 パターンの割合において父母間での差はなかった。

表2 夫婦ペアレンティング調整4パターンの母親父親別割合 N=499

	n	促進—批判				x <sup>2</sup>
		低群—低群	高群—低群	低群—高群	高群—高群	
母親	291	71 24.4%	80 27.5%	79 27.1%	61 21.0%	ns
父親	208	56 26.9%	57 27.4%	59 28.4%	36 17.3%	

χ<sup>2</sup>検定: ns ( not significant)

\*4パターンのグループ分けの基準値

母親 促進低群: 30点未満、高群: 30点以上

母親 批判低群: 18点未満、高群: 18点以上

父親 促進低群: 30点未満、高群: 30点以上

父親 批判低群: 17点未満、高群: 17点以上

次に各尺度並びに属性において夫婦ペアレンティング調整4パターンの比較を Kruskal-Wallis test (クラスカル・ウォリス検定)その後多重比較:Dunn 検定を行った。結果を表3に示す。

4パターンについて有意水準 5%未満で有意差が認められた項目は、母親では育児幸福感の「夫への感謝」、育児ストレスの「育児不安」「夫の支援のなさ」結婚の現実の「相思相愛」「妻への理解・支援」「夫への理解・支援」であった。父親は育児幸福感の「育児の喜び」「夫への感謝」、育児ストレスの「心身的疲労」「育児不安」、結婚の現実の「相思相愛」「妻への理解・支援」「夫への理解・支援」であった。

育児幸福感、結婚の現実の得点が最も高いのは、「促進行動が高く批判行動が低い」パターンであり、育児ストレス得点が最も高いのは「促進行動が低く批判行動が高い」パターンであった。

年齢、子どもの数、末子年齢、夫婦の年齢差は4パターンにおいて有意な差はなかった。

表3 夫婦ペアレンティング調整パターンと心理状態等の比較と N=499

高低群	n	母親 n=291				p	父親 n=208				p
		促進—批判					促進—批判				
		低—低	高—低	低—高	高—高		低—低	高—低	低—高	高—高	
幸育		Median					Median				
福児	子どもの絆	17.0	18.0	17.0	17.0		17.0	18.0	16.0	17.5	
感	育児の喜び	24.0	25.0	24.0	24.0		23.0	25.0	24.0	24.5	*
	夫への感謝	17.0	19.0	16.0	18.0	*	16.0	19.0	16.0	18.0	*
ス育	心身的疲労	17.0	16.0	17.0	16.0		11.0	10.0	13.0	11.0	*
ト児	育児不安	14.0	11.0	16.0	12.0	*	12.0	9.0	14.0	11.0	*
レ	夫の支援のなさ	10.0	7.0	14.0	7.0	*	10.0	8.0	9.0	10.0	
ス											
		15.0	17.0	16.0	16.0		18.0	20.0	19.0	19.5	
完自	高い目標	14.0	16.0	15.0	17.0		16.0	18.0	16.0	18.0	
全己	完全でありたい	13.0	13.0	13.0	13.0		11.5	12.0	13.0	13.5	
主志	欲求	16.0	18.0	18.0	18.0		17.0	18.0	18.0	19.0	
義向	ミスを気にする	16.0	18.0	18.0	18.0		17.0	18.0	18.0	19.0	
的	自分の行動に漠然とした疑いを持つ	16.0	17.0	15.0	16.0	*	15.0	16.0	14.0	15.0	*
	相思相愛	15.0	16.0	13.5	14.0	*	12.0	15.0	12.0	14.0	*
“結	夫への理解・支援	13.0	15.0	13.5	14.0	*	14.0	15.0	14.0	15.0	*
婚	妻への理解・支援	38.0	37.0	37.0	37.0		38.0	38.5	39.0	40.0	
実	年齢	2.0	2.0	2.0	2.0		2.0	2.0	2.0	2.0	
の	子どもの数	4.0	3.0	4.0	3.0		3.5	3.0	4.0	4.0	
状	末子年齢	2.0	2.0	2.0	2.0		2.0	2.0	2.0	2.0	
況	年齢の差										

\*: Kruskal Wallis 検定 p<0.05

└─多重比較: Dunn 検定 調整済み有意確率で有意差が認められたもの

### (3)夫婦ペアレンティング調整パターンと話し合いの状況

夫婦の子育てに関する話し合いの状況について表4-1, 4-2に示す。夫婦ペアレンティング調整4パターンとの関連について、母親は「話し合いの有無」、「話し合いの頻度」、「話し合いで納得」に有意な関連があると判断された。一方、父親は、すべての項目において有意な関連はなかった。

表4-1 夫婦ペアレンティング調整パターンと話し合いの状況等との関連

N=499

		母親					$\chi^2$	$p$
		促進-批判						
	高低群	低-低	高-低	低-高	高-高			
話し合いをした	ない	23 7.9%	10 3.4%	20 6.9%	2 0.7%	22.40	p<.01 *	
	調整済み残差	3.3	-1.7	1.7	-3.5			
ある	48 16.5%	70 24.1%	59 20.3%	59 20.3%	32.40	p<.01 *		
	調整済み残差	-3.3	1.7	-1.7			3.5	
結婚した時	いいえ	40 16.9%	59 25.0%	51 21.6%	47 19.9%	1.03	.79	
	はい	8 3.4%	11 4.7%	8 3.4%	12 5.1%			
妊娠した時	いいえ	28 11.9%	29 12.3%	36 15.3%	30 12.7%	5.85	.12	
	はい	20 8.5%	41 17.4%	23 9.7%	29 12.3%			
出産後	いいえ	10 4.2%	20 8.5%	13 5.5%	15 6.4%	1.19	.75	
	はい	38 16.1%	50 21.2%	46 19.5%	44 18.6%			
家族形態	核家族世帯	66 22.7%	71 24.4%	74 25.4%	57 19.6%	1.72	.63	
	三世帯世帯	5 1.7%	9 3.1%	5 1.7%	4 1.4%			
就労している	いいえ	42 14.4%	42 14.4%	38 13.1%	37 12.7%	2.99	.39	
	はい	29 10.0%	38 13.1%	41 14.1%	24 8.2%			
話し合いの頻度	数えきれないほど	28 9.6%	43 14.8%	31 10.7%	47 16.2%	24.9	p<.01 *	
	調整済み残差	-2.3	0.5	-2.5	4.5			
5回程度以下	43 14.8%	37 12.7%	48 16.5%	14 4.8%	32.2	p<.01 *		
	調整済み残差	2.3	-0.5	2.5			-4.5	
話し合いで納得	した	30 10.3%	57 19.6%	25 8.6%	40 13.7%	32.2	p<.01 *	
	調整済み残差	-1.9	4.0	-4.3	2.3			
しない・どちらでもない	41 14.1%	23 7.9%	54 18.6%	21 7.2%	1.9	-4.0	4.3	-2.3
	調整済み残差	1.9	-4.0	4.3				
親の実感があった	はい	17 5.9%	34 11.8%	25 8.7%	15 5.2%	7.34	.06	
	いいえ	52 18.1%	46 16.0%	52 18.1%	46 16.0%			
産後イメージ通り	はい	13 4.5%	20 6.9%	12 4.2%	12 4.2%	2.29	.51	
	いいえ	57 19.8%	60 20.8%	65 22.6%	49 17.0%			
里帰り別居	はい	43 14.8%	45 15.5%	41 14.1%	37 12.8%	1.34	.72	
	いいえ	28 9.7%	35 12.1%	37 12.8%	24 8.3%			

 $\chi^2$ 検定

表4-2 夫婦ペアレンティング調整パターンと話し合いの状況等との関連

N=499

		父親					$\chi^2$	$p$
		促進-批判						
	高低群	低-低	高-低	低-高	高-高			
話し合いをした	ない	16 7.7%	9 4.3%	11 5.3%	4 1.9%	5.12	.16	
	調整済み残差							
ある	40 19.2%	48 23.1%	48 23.1%	32 15.4%	1.05	.78		
	調整済み残差							
結婚した時	いいえ	32 19.0%	35 20.8%	38 22.6%	26 15.5%	1.05	.78	
	はい	8 4.8%	13 7.7%	10 6.0%	6 3.6%			
妊娠した時	いいえ	26 15.5%	27 16.1%	28 16.7%	20 11.9%	0.84	.84	
	はい	14 8.3%	21 12.5%	20 11.9%	12 7.1%			
出産後	いいえ	12 7.1%	13 7.7%	12 7.1%	9 5.4%	0.27	.96	
	はい	28 16.7%	35 20.8%	36 21.4%	23 13.7%			
家族形態	核家族世帯	50 24.0%	53 31.5%	55 32.7%	35 20.8%	2.1	.55	
	三世帯世帯	6 2.9%	4 2.4%	4 2.4%	1 0.6%			
就労している	いいえ	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.6%	4.8	.18	
	はい	56 26.9%	57 33.9%	59 35.1%	35 20.8%			
話し合いの頻度	数えきれないほど	21 10.1%	32 19.0%	25 14.9%	21 12.5%	6.26	.09	
	調整済み残差							
5回程度以下	35 16.8%	25 14.9%	34 20.2%	15 8.9%	3.71	0.29		
	調整済み残差							
話し合いで納得	した	27 13.0%	37 22.0%	30 17.9%	20 11.9%	3.71	0.29	
	調整済み残差							
しない・どちらでもない	29 13.9%	20 11.9%	29 17.3%	16 9.5%	1.9	-4.0	4.3	-2.3
	調整済み残差	1.9	-4.0	4.3				
親の実感があった	はい	11 5.3%	9 4.4%	11 5.3%	6 2.9%	0.35	0.95	
	いいえ	45 21.8%	48 23.3%	47 22.8%	29 14.1%			
産後イメージ通り	はい	19 9.3%	19 9.3%	13 6.3%	13 6.3%	3.06	0.38	
	いいえ	36 17.6%	38 18.5%	45 22.0%	22 10.7%			
里帰り別居	はい	23 11.1%	36 17.4%	36 17.4%	20 9.7%	6.25	0.1	
	いいえ	32 15.5%	21 10.1%	23 11.1%	16 7.7%			

 $\chi^2$ 検定

## 5. 考察

### (1) 夫婦ペアレンティング調整パターンと互いの認識

夫婦が互いに協力しあう姿勢をもって子育てを行うことが子どもや家族にとってポジティブな効果をもたらすことが明らかにされている<sup>14)</sup>。コペアレンティングは夫と妻がそれぞれ最適と信じる子育てをバラバラに行っているだけでは成立しないとされている<sup>19)</sup>。

今回、夫婦ペアレンティング調整は「促進行動が低く批判行動も低い」「促進行動が低く批判行動が高い」「促進行動が高く

批判行動が低い」「促進行動が高く批判行動も高い」の4パターンに分類し支援への示唆を導き出そうとした。夫婦ペアレンティング調整の4パターンに着目すると母親、父親のパターンに有意な差はなかった。父親の調査結果は、母親の自分(父親)に対する育児参加への促進行動と批判行動について、どのように受け止めているかを質問している。母親自身の認識と、父親が受け止めた母親の行動の認識には差がなく、母親父親間の認識にずれがみられないことが明らかになった。

親になると夫婦二人だけの時の、自由で和気あいあいとした親密の感情は低くなり、母親になると夫に対して頑固になり、喧嘩した場合感情的になることが、結婚 2~3 年目頃多くなる傾向がある<sup>20)</sup>。そんな中でも子育てについては、互いの行動に対する認識にずれがないことから、生活の真真中に「子育て」という事柄が、客観的に認識されていることが推察される。

## (2) 夫婦ペアレンティング調整の4つのパターンの比較と関連

本研究により父親の子育て関与に対する母親の調整行動として、「促進行動が高く批判行動が低い」パターンの母親は、育児幸福感が高く、育児ストレスが低いことが明らかとなった。つまり育児をしていて感じる幸福な気持ちが高く、育児へのストレスが少ないことであり、尺度の解釈からも心理状態が良いことが伺える。さらに話し合いに納得していること、結婚観である相思相愛や夫妻への理解・支援が有意に関連しており、「促進行動が高く批判行動が低い」パターンに近づけるための支援の方向が示唆された。

母親による父親の家庭内役割を重視する考えや、母親の認知する父親の育児コンピテンス(スキル)の高さが父親の育児関与にかかわることが示されており<sup>21)</sup>、こうした「促進行動が高く批判行動が低い」パターンの背景に母親の家庭内役割や父親のコンピテンスへの認識が関係していることも推察されることから支援のための検討が課題となる。

さらに、父親の「促進行動が高く批判行動が低い」パターンは結婚の現実である「夫への理解・支援」、「妻への理解・支援」が高いことが示されていた。「妻への理解・支援」に加え、「妻の夫への理解・支援(心からの尊敬、能力才能を認め伸ばすために助ける、仕事、活動を理解し支える、夫を立てる)」の結婚観をもつことによって、夫は妻を信頼し相手に対してオープンな心理状態を示すと考えられ<sup>18)</sup>、促進行動が高く、批判行動が低くなっていると考えられた。妻が夫への感謝の気持ちを持っていることを父親が受け止められていることから、互いの関係性がうまくいっていることが伺える。

夫も妻も「相思相愛」により、促進行動が高くなり、批判行動は少なくなっている。すなわち互いの信頼や尊敬愛情に対して大切にす結婚観により、促進行動は当然のこととして見られているが、批判行動が低く、促進や批判と異なる行動が現

れてくるのではないかと考える。

子どもが一人目であるより、二人目になるほうが性役割分業は進むと考えられる中で<sup>17)</sup>、夫婦の関係性に関係すると考えられる結婚観が、こうした性役割分業観を乗り越えることが可能となると考えられる。また、母親が「促進行動が高く批判行動も高い」パターンでは、話し合いを数えきれないほど行っている。このことから、夫婦のコミュニケーションは良好であると考えられ、コミュニケーションがスムーズであることは、「促進行動がいつもある」に加え「批判行動もいつもある」とが推察される。一方、「促進行動が低く批判行動が高い」パターンは、夫の支援が少なく、育児不安が高く、夫への感謝が低い特徴があり心理状態はネガティブと考える。また、この時期の母親は育児への自信が低くなる<sup>3)</sup>ことから「育児への自信」が関係していることが推察された。促進行動が低く批判行動が高い母親が、父親の育児関与を妨げる直接間接の原因となりうる<sup>2)</sup>ことから、今後「夫の育児関与に対する考え」について母親への聞き取り調査を行い、父親の育児関与増加を阻んでいる要因について明らかにしていきたい。

夫婦ペアレンティング調整が良い形で行われるためには、あらかじめ結婚観に対する意識を高めるためのプランと共に、子育ての話し合いで納得できるものとするのが効果的な介入の重要な視点と考えられる。

一方で自己完結型の完全主義は、夫婦のコペアレンティングに影響していないことが明らかとなった。自己志向の完璧主義は、自己の枠組みの中で完全主義という概念を多次元的にとらえており、促進と批判の組み合わせによる4つのパターンでは、明確な関係性は見られなかったと考えられる。

今回、夫婦ペアレンティング調整を4パターンで検討するという試みは、夫婦ペアレンティング調整の姿を実態に即したパターンという新たな視点からとらえることができたと考える。

## 6. 結論

夫婦ペアレンティング調整の促進行動と抑制行動の4パターンにおいて、「促進行動が高く批判行動が低い」パターンが最も良好な心理状態と示された。さらに、このパターンの母親は、子育ての話し合いが行われており、夫の考え・行為を理解し、もっともだと認める、つまり「納得」している。また、「結婚の現実」「夫への理解・支援」「妻への理解・支援」「相思相愛」すべてにおいて、夫に対する思いが高い特徴があった。

母親が父親の子育て関与への批判行動を抑え促進行動を強化するために夫婦の結婚観への働きかけや子育てに関する話し合いによる「納得」が重要な視点になることが示唆された。

## 引用文献

- 1) Mchale JP, Khazan I, Erera P, et.al..Coparenting in Diverse family systems.In Bornstein, M.h. (ED)Handbook of parenting 2nd ed.:Vol3 Being and becoming a parent.Hillsdale,NJ: Lawrence Erlbaum Associates,Inc.2002,2, 75-107.
  - 2) McBride BA., Brown GL, Bost K K, et al. Parental identity, maternal gatekeeping, and father involvement. Family Relations.2005, 54,60-272.
  - 3) 清水嘉子. 乳幼児の母親の心身の状態に関する縦断研究.日本助産学会誌.2017, 31 (2),120-129.
  - 4) 加藤道代, 黒澤泰, 神谷哲司. 夫婦ペアレンティング調整尺度作成と子育て時期による変化の横断的検討.心理学研究.2014, 84(6), 566-575.
  - 5) 加藤道代. 子育て初期の母親の養育意識・行動とサポート資源.国立婦人教育会館研究紀要 .1999, 3,53-59.
  - 6) Benesse 次世代研究所. 妊娠出産子育て基本調査・フォローアップ調査-妊娠期から子どもが2歳になるまでの家族の成り立ちを探る.2011, 1-117.
  - 7) ベネッセ教育総合研究所.乳幼児の父親についての調査.2016.
  - 8) 小野寺敦子. 親になることにともなう夫婦関係の変化.発達心理学研究.2005, 16(1), 15-25.
  - 9) 牧野考俊,金泉志保美,伊豆麻子, 他.父親の育児に関する研究動向と今後の課題.小児保健研究.2011,70 (6),780-789.
  - 10) 藤本美穂,今西誠子.子育て支援に関する文献検討-実施した事業の効果に焦点を当てて-健康医療学部紀要,2016, 1, 73-81.
  - 11) 加藤道代, 黒澤泰, 神谷哲司. 母親の gatekeeping に関する研究動向と課題-夫婦ペアレンティングの理解のために.東北大学院教育学研究科研究年報. 2012, 61(1), 109-126.
  - 12) 加藤道代, 黒澤泰, 神谷哲司. コペアレンティング-子育て研究におけるもう一つの枠組み.東北大学院教育学研究科研究年報.2014, 63(1), 83-102.
  - 13) 佐々木裕子, 高橋真理.父親から見た無第一子出生前後における夫婦関係の評価-家族イメージ法による分析を中心に-.家族看護研究.2007, 13(1), 53-59.
  - 14) 中川まり.共働き夫婦における妻の働きかけと夫の子育て・家事参加.人間文化創成科学論叢.2010, 305-313.
  - 15) 清水嘉子, 関水しのぶ, 遠藤俊子. 母親の育児幸福感尺度の短縮版尺度開発, 日本助産学会誌.2010, 24 (2), 261-270.
  - 16) 清水嘉子. 子育て環境の認知に焦点をあてた育児ストレス尺度の妥当性に関する研究. ストレス科学.2001, 16(3), 176-186.
  - 17) 桜井茂男,大谷佳子. “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係.心理学研究. , 1997 68(3), 179-186.
  - 18) 柏木恵子, 平山順子. 結婚の“現実”と夫婦関係満足度との関連性-妻はなぜ不満か-心理学研究.2003, 74 (1), 122-130.
  - 19) Feinberg M..The internal Structure and ecological context of coparenting.A framework for research and intervention. Parenting: Science and Practice. 2003, 12,1-21,
  - 20) 小野寺敦子. 親になることにともなう夫婦関係の変化.発達心理学研究.2005 , 16(1), 15-25.
  - 21) Rane, T.R.,&Mcbride,B.A. Identity theory as a guide to understanding fathers’ involvement with their children.Journal of Family Issues,2000,21 (3),347-366.
  - 22) 永井暁子. 終章 対等な夫婦は幸せか. 松田茂樹編. 対等な夫婦は幸せか. 東京, 勁草書房. 2007, 137-144.
- 清水嘉子. 子育て期にある夫婦ペアレンティング調整パターンと関連要因. 母性衛生, 2020, VOL61 No2, 340-351. 一部加筆